

『科学理論における
ヘーゲル大論理学批判』
概要書

速川治郎

『科学理論におけるヘーゲル大論理学批判』概要 速川治郎

本論文は四百字詰め原稿用紙、千五百枚を若干超える程度のものである。

さて、緒論において、一般科学理論を展望する。一般科学は広、中、狭科学に分かれ、一般科学理論は分析的科学理論と非分析的科学理論とに、あるいは、分析的思考、解釈的思考、弁証法的思考に分かれる。分析的科学理論は論理学、認識論、自然科学哲学を総合したものであり、非分析的科学理論は、現象学、解釈学、歴史的方法、弁証法を取り扱うものであり、精神科学理論と言うこともできる。『大論理学』の解釈、批判に必要なものとして解釈学がある。これには探求的解釈と定説的解釈とがある。前者はテキストの解釈をいろいろと探求するのに対して、後者はテキストを聖書のように尊重し、テキストの決まった意味を諸種の問題に応用する面が強い、また外国語の理解は決まった文法を基にするから定説的解釈である。このような解釈学が『大論理学』研究、批判に入り込むのである。以上が緒論の概要である。

第一編では、ヘーゲルと対立していると思われるフレーゲの論理学の叙述、ヘーゲルに賛成しているが、ヘーゲルの論理学を記号化しているギュンターの論理学を論述する。また、ヘーゲル『大論理学』の一部、しかし重要な部分を記号論理学で提出しているベンゼの論理学を述べる。さらに、ヘーゲルと同時代の哲学者であり、ヘーゲルに対立しているフリースに触れる。何故ならば、そのような対立により、ヘーゲルの思想を浮き立たせたいからである。ヘーゲルの外に立つことによって、逆にヘーゲルの思想の内に入り込めるということを考えたのである。こうして、フリースが還元主義的心理主義者ではないことまでも触れる。また、フリースの哲学的論理学は経験心理学によって証明されるのではないということにより、フレーゲと通ずるものをもっているのである。

フリース学派を唱導するネルゾンのヘーゲル論理学批判を叙述するが、それと共に、筆者の考えを述べて行く。ヘーゲルは矛盾を対立と同じにしているが、間違いであることを筆者は指摘する。ネルゾンによれば、弁証法の結果は思弁的なもの、神秘的なものであり、その最大の原因は矛盾の方法にあり、また、即自、向自、即且向自という単調な三拍子の繰り返しである。ネルゾンがヘーゲル論理学を非アリストテレス論理学であると言っているのは、ギュンターと同じである。

ヘーゲルは〈これは動物である〉をEs sei Tier. と書くが、ネルゾンは、それはEs sei ein Tier. であり、直観の直接的認識のみが個物に達するのであって、この直観こそ概念表現の前にある冠詞によって示されると言う。そして、ヘーゲルは文法的混乱を引き起こし、対象が概念に従属するという意味も、主語が述語に従属するという意味もなくしてしまい、対象と概念、主語と述語を同一視するとネルゾンは述べる。

ネルゾンによれば、ヘーゲルは対象の役割と概念の役割とを混同して、論理的神秘主義に陥る。アリストテレス論理学の意味で、対象に述語が添えられるか、添えられないかはヘーゲルにとっては不必要である。ヘーゲルにとって、繫辞は主語を述語の中に包摂するという意味をもたず、主語と述語との同一性、一致を意味する。だからヘーゲル論理学には本来的

な判断がないとネルズンは考える。

ヘーゲルは「有は無である」という命題を立てるが、これは間違いだとするのがネルズンである。何故ならば、有という概念に属するもろもろの対象が無であると言えないからである。有が無規定であるという現存は無ではないのである。

ヘーゲルの法学、国家学は高い評価を得ているが、ヘーゲルは政治に関しては静観主義を取っている。ヘーゲル哲学は部分的に手直ししても、良くなるものではなく、その哲学を全部捨ててしまうほかない。フリース哲学の側に立つネルズンにしてみれば、当然な言い方である。以上で第一編が終わり、今度は第二編を概括しよう。

大論理学批判の前構成として、予断が挙げられ得る。了解は予断から離れている訳ではない。誰でも何かを研究する場合、予断をもっているのである。次にヘーゲル批判の一例として、ポッシの考えを述べる。非弁証法家Aと弁証法家Bとが討論を行うとき、AがBに「あなたは弁証法の方法を利用しますか」と問う。そこでBは「ええ、弁証法の方法を利用します」と答えたとすると、弁証法は矛盾を含んでいるから、「いいえ、弁証法の方法を利用しません」という答えをもちたことになり、結局、Bは答えられなくなってしまう。

次に始元が述べられる。ヘーゲルは、直接的なものとしての始元は有であると主張するが、しかし、筆者は、有は、差し当たりヘーゲルという自我、自己への反照であり、有という他者への反照であり、こういう自己への反照と他者への反照との、有というヘーゲルの考えた内容としての自己への反照であると一応考えておく。

形式論理学は形式を専ら考え、質料に無関係であり、外面的であるが、しかし、その形式と質料との統一をヘーゲルは考える。が、彼は独特の古典論理学の格を考えたのである。

ヘーゲルは大論理学を客観的論理学と主観的論理学とに分け、前者はカントの超越論的論理学に相当するが、後者は一般的論理学に相当するというよりは、むしろ、概念論理学と言えよう。大論理学は全体として概念の概念自身である自己への反照に基づく自己運動と云うことができる。

偉大なる論理学者フレーゲによれば、論理学の中で概念と呼ばれているものは、我々が関数と呼んでいるものと関連している。いや、それどころか概念は真理値を常にもっている関数である。しかしフレーゲは、概念が日常言語となった関数、例えば「()は学者である」の中でいかに構成されるかを示さなかった。概念は対象を規定する図式として示されるのである。学者を類とすれば、歴史学者、弁証法学者は種である。学者という概念は否定の否定である、すなわち、他者の否定として歴史学者、弁証法学者があり、さらに、これらの否定が学者である。最高類が始元であり、ヘーゲルの始元は純粹有であるが、物自体とも言える。こうして一種の系統樹ができる。すると始元は終末、終点でもある。しかも、始元は、人間の自発的思考行為として任意に始められる場合にのみ始元である。が、任意に始められることが変えられない限り、いや、それどころか変えてはならない限り、始元は当為になる。

ヘーゲルにおいては、論理学の始元は直接的なものであり、有である。そして、周知である

有、無、成の展開を述べる。有と無とが区別されていることは対象的論理であり、有と無とが分離されていないことは反照的論理であると言えよう。

ヘーゲルはフリースのような分析的思考を結果的には拒否する。しかし、このことは、いわゆる二値的論理になってしまっている。その限りで、ヘーゲルは分析的思考を行っているが、彼はそのことに気がついていない。

有が無になっている消滅、無が有になっている発生が成であり、この成が動揺、崩壊して、静止した一つの結果、これが定有である。あるいは、発生運動と消滅運動とを否定して、定有が現れるとも言えよう。

主観としての概念があるということと客観としての実在態があるということは一種の先入観であり、概念、実在態は共に一つの脱揚であり、両者は一つのものである。ヘーゲル的には、それは、概念と実在態との統一である。

これまでは、どちらかという、外からのヘーゲル批判を取り上げたが、今後は大論理学の内からの批判を展開する。批判と言っても、大論理学をフリース、ネルソンが行ったように、そのすべてを拒否するのではない。大論理学の中の文の意味を明確化することであり、反照論理学化を行うことである。大論理学の軌道の上を走りながら、大論理学中の文の意味の明確化により、その軌道の上を走らないのである。

そこで、反照論理学の中核として、措定的反照、外的反照、規定的反照という諸論理の批判的論述を行う。そこでまず問題になるのがヘーゲルの文中のsichの使用である。例えば仮象は非自立的なものであり、ヘーゲルはこれを否定的なものとし、「この否定的なものと、あるいは、非自立性と自己との関係は、仮象の直接態である」という。自己は否定的なものを指すから、否定的なものと否定的なものと関係があると普通解釈するが、全く同じものの間に関係があるということは論理的に成り立たない。したがって、否定的なものと自己とを N_1 、 N_2 と記号化して、関係を成立させ得ると筆者は考えたのである。この考えは、ヘーゲルが自己を語るとき、常に出てくる。

始めに本質と仮象とのヘーゲルの論述の中で論理的に不適切と思われる点を批判する。ヘーゲルによると、本質の反照運動は「無から無からへの運動である」が、この解釈について、四人のヘーゲル学者(寺沢恒信、見田石介、竹市健人、姜尚暉)の意見が違う。このことはヘーゲルの文に難点があることを意味する。寺沢は運動の出発点Aと到達点Bが有って、AからBへと運動するのではなくて、ただ運動が有るだけだと言うが、これが、彼らの中では一番適切だと思うが、この主張だと、「無から無への運動」は、Aの否定からBの否定への運動でなければならない。ヘーゲルの否定態、否定は、大論理学全般に互ってであるが、何を否定しているか分からない書き方になっている。これを明確にしなければならない。また不明確であるがゆえに、分析哲学者、記号論理学者に攻撃されることにもなる。それに耐えるためには弁証法はargumentalanalytische Dialektik弁証法となり、記号論理学の考えの中に入って行きながら、しかも記号論理学の普通の成果と違う弁証法を考えるべきである。

直接態 U_1 の否定的なもの N_1 は展開してないものであり、 U_1 の否定的なもの N_2 は展開したものであり、 U_2 である。 U_2 は U_1 の否定であり、 U_1 の U_2 への反照である。措定的反照論理は、無媒介的直接態としての、〈私〉の外の他者を措定することが実は媒介的直接態としての、〈私〉の内のものに属するという自己を措定することであり、その限り自己は他者であるという運動をするのである。

外的反照論理は直接的なものがそれ自身として有ることを規定している。だが、この段階で、直接的なものと反照とが同一であるともヘーゲルは言う。その同一は、外的反照のもともとの意味からはずれてしまう。そういうずれをヘーゲルは意図的に使用するのである。

規定的反照は、措定的反照と外的反照との統一であるが、規定的反照の章は規定的反照のことはほとんど書かれていない。比較的多く書かれているのは反照規定である。規定的反照は何かを規定する反照のように見えるが、反照を規定することなのである。ことことは「規定的」を通して反照する「自己内反照」であり、こうして特に措定されている。その限りで、規定的反照は反照規定である。

反照は論理自体の運動であると同時に、反省、熟慮の運動である、ここに二つの運動の間での論理の展開がある。二つの運動は間において相対的に独立してあるだけではなく、相互浸透、つまり相浸、相入している。このことが反照論理学である。

反照論理学における反照諸規定として、ヘーゲルに沿いながら、同一性、区別、矛盾を批判論述する。ヘーゲルは同一性を単純に $A=A$ と言っているが、これの中の二つの A は間をもつ論理であり、同一だから間がないはずなのに、“=”という間が有るのである。そこに措定されて有ることが現れ、 A が自己 A への反照となっている。

$A=A$ において、左位の A を A_l とし、右位の A を A_r とし、 $_{\text{。}}A$ を **A の位置を考えなし**という意味、 $_{\text{。}}A$ を **A の位置を考える**という意味にすると、 $_{\text{。}}(A_l=A_r)$ があり、 $_{\text{。}}(A_l \neq A_r)$ があることになり、ヘーゲルの言うように、同一性が区別でもある。だから、同一性と区別とは共に反照して自己自身への否定的関係であることが自ずから分かり、それは反照論理学の一性質である。

媒介された直接態を v とし、左位の v を v_l とし、右位の v を v_r とし、 G を相等性であるとし、 U を不等性であるとするならば、 $_{\text{。}}(Gv_l, v_r)=Gv, v$ へ反照して v が肯定であり、 $_{\text{。}}(Uv_l, v_r)$ へ反照した v が否定である。こうして肯定者と否定者が現れるようになる。 $+y$ と $-y$ とにおいて、 $+$ と $-$ とを考慮に入れないを $_{\text{。}}+-$ とすると、 $_{\text{。}}+-(+y \wedge -y)=y$ があり、 $_{\text{。}}+-\{(+y)+(-y)\}=2y$ がある。このように記号を使用して、ヘーゲルの意味のあいまいな点を明らかにして行く。

ヘーゲル論理学は矛盾を見いだす論理か、それとも矛盾を解消させる論理かという問いを出した論理学者がいるが、ヘーゲル大論理学を読むと、両方であることが分かる。しかし、矛盾は矛盾律を犯す矛盾でない。

運動は「同一の今において、ここに有り、そして、ここに無いということによって」あるという有名なヘーゲルの文がある。しかし、「有る」は運動していることを示せない言葉である。「J

Rの電車が今、品川駅に有る」では電車は動いていない。運動を静止している言葉で表そうとする所に無理がある。こうして「今ここに有り、ここに無い」という意味を解明して行く。仮にその文が運動を表しているとしても、その文では速度の速い、遅いは表せない。またヘーゲルは、「同一の観点から」矛盾し合う語が出ていると表現するするが、厳密に検討すると、「同一の観点から」ではないことをも解明する。ヘーゲルの矛盾は言語表現形式において矛盾であり、意味内容から言えば、差異であることを筆者は見抜く。が、差異であることを明らかにしながら、表現形式上の矛盾を使用することは可能である。

反照論理学の根拠として、ヘーゲルの展開に沿いながら、本質と根拠、絶対的根拠、規定的根拠、制約を批判論述する。

本質₁は、本質₁の自己(本質₂)への還帰において、自己(本質₂)に規定態を与えるが、~~本質₁の中の本質は、本質₂の中の本質と同一であり、また、本質₂は本質₁の否定者(本質₂)であると規定され、本質₂は意味の運動であり、他者へ反照するものであり、本質₂が止揚され、根拠が有るのである。~~

形式的根拠は、根拠と根拠付けられたものとの同一の内容であり、土質力学における実験式は根拠であり、根拠付けられたものであるという典型的な例である。

実在的根拠は根拠と根拠付けられたものと異なる内容をもつ。完全な根拠は根拠と根拠付けられたものとの同一性の回復であり、完全な根拠関係である。

制約は措定されて有るものであり、根拠がそのまま有ることは、そう言われた限り、既に措定されて有ることであり、この語は、そのようにして根拠付けられたものでもある。したがって、制約と根拠とは同じものである。制約から根拠への反照は同時に根拠から制約への反照であり、一つの反照である。

次に反照論理学の萌芽として、或るもの、有限性、無限性を述べる。これらの反照構造に注意を払いながら考える。定有の自己内有Insichseinは、漠然とした定有₁が自己自身、すなわち、規定された定有₂の働きによって、₁、₂の無い定有自身の内へ戻っているのである。このことが反照論理学上の反照運動である。「或るもの、他のもの」を論ずると、ヘーゲルにおいては物自体の論究になる。物の即自有は無媒介的直接態であるが、しかし、このように措定されて有ることは媒介的直接態である。ここに反照論理学の萌芽がある。

有限なものの二つの契機は当為と制限であるが、当為は当為であるがゆえに超えられてはならず、それゆえ制限を含み、超えられない制限があるから、制限は当為を含む。当為も制限の有るものも有限なものである。これは当為と制限とを「有限なものの自己内有Insichseinの中に含んでいる」。この文はヘーゲル独特のものであり、有限なものとsichとは、意味上一つであるのに、両者になっているという表現形式から言えば、別のものになっている。ここに有限なもの自身の力動態がある。自己がこれとは別のものであり、別のものが自己であるという運動がある。これが自己内有となって現れ、反照構造が現れている。

有限性の章の中で、制限の「自己同一性、すなわち否定の否定は肯定的有である」という文

があるが、「無限なもの」へ移行するきっかけになっている。論理的には、制限の否定の否定は制限になってしまう、それなのに、ヘーゲルにおいては制限の否定の否定が無限なものである。このことをはっきりさせておかない論理展開は欠陥である。

真無限の具体例として周知のように円がヘーゲルによって提示されるが、彼によると、円は初めの点も、終わりの点もない。しかし、円を描き始める点と描き終える点とは有るのであり、ヘーゲルは円に関しては静的な完成、固定したものを提出していることになる。

無限に関して、例えば物質が無限なものであるとすると、このことを考えている特定な人間の有限な思考があり、有限な思考の中で物質が思考と一致する。有限な思考の中に思考の反対の物質をもち、この外なる物質の中で思考が物質と一致する。物質が外に顕然と有ることそのことにおいて思考がある。しかし、そういう思考が有ることにおいて物質は外に有るのである。このような意味で物質と思考とが一致する。物質は思考と違うのだと主張することにおいて、そういう物質は思考と一致している。物質の構造を語れば、語るほど、思考内容の構造となる。しかし、これは単純な思考内容でなく超観構造である、すなわち主客合一の構造である。

一つの或るものが独立して有る向自有は一者として有ること、つまり向一者有である。これは一個の観念態がこれと区別されることなく実在態である。この意味では単なる観念態ではない。観念実在態、実在観念態であり、超観態である。

向自有は向自有自身への反照として独立して有るが、他者への反照として量である。そこで独立して量が有るということは向自有自身(自己)への反照と他者(量)への反照の自己(向自有という自己と向自有と同じである量という意味で、量という自己)への反照であるところの論理学である。

連続的の大きさは分離性を反照し、分離的の大きさは連続性を反照している。このことが反照論理学の一つの形式である。

ヘーゲルは数に関して、主に加減、乗除、幂について論じている。数の質的区別は単位と集合数である。この区別は相等性、不等性であるから、反照規定の課題であり、数を論ずることに反照規定が反照しているのである。

量的無限性の項に微分、積分がヘーゲルによって論じられているが、その微分、積分をさらに突っ込んで論じ、ここでも反照の有ることを述べ、ヘーゲルの考えの多くを批判する。

ヘーゲルが数学を論じている内容は超数学であることが分かる。

幂相関の項の注釈で概念の重要性をヘーゲルは説いているが、これこそ概念から幂相関への反照である。このことは到達する先が既に分かっているということである。

「特有化する度量」に出てくる比熱、「実在的度量」の章に出てくる比重、中和、化合は、大体現代化学を基にして論究した。その方がうまく説明できるからである。しかしヘーゲルの叙述では現在妥当しない点をも述べておいた。

現存する或るものは、これの媒介であることが直接態へと反照することによって、成立し

た直接態である。媒介の直接態への反照により出現した直接態があるから、現存する或るものは物である。現存する物自体ということで、意識されて有る物自体へと反照しているのである。物の諸性質は物へと反照し、物は諸性質へと反照する。Wesentlichkeit本質的本性は本質であるということであり、自己₁への反照と他者への反照との自己₂への反照である。自己₁は関心の有る主語として取り上げられた物事であり、他者は自己₁以外の一定の、特定なものであり、そして自己₂は、自己₁と他者との統一体であり、この意味を明瞭化する出来事である。

現象₁は他者への反照として自己(現象₂)を表している。ここに現象の法則に関する反照論理学の重要な意味がある。「他者」は法則であり、これへと反照したものには、単なる現象₁から現象₂への運動があり、現象₂の意味変動がある。

本質的相関の内容は「直接的に有る自立態、直接態:S₀」と「反照した自立態、直接態:S₁」とをもつ。S₁とは直接態Sが反照したもの、すなわちS₁であり、言い換えれば、Sは実はS₁のSであり、反照したものであるから、もともとS₁となっているのである。S₀とS₁とは、それぞれ他者へと反照しているが、共にSであるので、統一している。

誘発する力が誘発される力を措定、前提する限り、誘発される力の誘発する力への反照であり、また逆に誘発される力は誘発する力を措定、前提する限り、誘発する力の誘発される力への反照である。こうして措定する反照と前提する反照との同一がある。

「力とその発現」、「外のもとの内のもとの相関」の各項、「絶対的なもの」の章において、記号を使って明確化を試みた。

噴火し得るという可能的な浅間山は、そういう可能性という値をもつ現実的な浅間山である。浅間山は、いつ噴火するか分からず、突然、爆発するという偶然的な現実性をもっている。ヘーゲルは「偶然的なものは、偶然的であるがゆえに、根拠をもたず、同様に、偶然的であるがゆえに、根拠をもつ」と言うが、彼の文をよく読むと、「偶然的なものは、…〈自己の中に〉根拠をもたず、同様に…〈他者の中に〉根拠をもつ」である。

ヘーゲルは「実在的可能性は実在的必然性である」と言うが、しかし、例えば「明日雨が降るかもしれない」ということが、「明日雨が必ず降る」ということにはならない。「実在的必然性」はメタレベルでの意味である。この点ヘーゲルの文は曖昧模糊としている。ヘーゲルの様相論理学の展開は意図的に反対語、対立語を同一にしようとするものであると言われても仕方がない面をもっている。

因果性の相関において、原因と結果とは、反照していることである。結果が有るからこそ、原因が有るのであり、原因が有るからこそ、結果が有るのである。

反照論理学の結実として概念を論究する。概念は、客観的世界を概念の主観態の中で認識すると共に、また、この主観態を客観的世界の中で認識することにおいて現れている。このことが反照論理学の結実を意味すると言えよう。

「反照の判断」において、ヘーゲルは、何らの反証も挙げられない場合には、多数の事例を総

数性と見てよいという暗黙の取り決めがあると述べているが、この主張はポパーの虚偽検証、反証の考えと同じであることを強調しておきたい。

推論の中で、理性においては、「概念」は自己(概念)の中で、自己(概念)を区別すると共に、概念の悟性的で、規定されたもろもろの区別の統一としてある」とヘーゲルは言うが、概念は進展した、新局面に有るものであり、(概念)は直接的なもの、悟性的なものであり、概念は文法的には概念であるが、ここでは(概念)と同じく直接的なもの、悟性的なものでなければならない。この文に関しては反照論理学、弁析法による説明が必要である。

ブルークェの機械的論理計算をヘーゲルは、概念を欠く形式だからと言って、非難する。ヘーゲルの概念は「これの他有の中に自己を保存するもの」であるが、ヘーゲルは「他者」の中に自己を保存するという言い方もしている。ということは「有」と「もの」とは明確に区別されていないということである。このことはヘーゲルの文の至る所に出ている。

「機械的関係」の中の「機械的過程」において、「太陽系の中心を否定して、否定に反照するものが普遍性である」とヘーゲルは言うが、この普遍性は結局「法則」、例えばケプラーの第一法則のことである。法則を出すために、反照を使ったと思われるが、しかし、反照を使えば法則になるとは必ずしも言えないことに注意すべきである。

ヘーゲルの「生命」という意味で使っているLebenを人間生活という意味に変えて展開した。他人が生きていることは、客観態であり、私が生きていることは主観態であるが、自我は他我であり、他我は自我である。その意味で両者の統一があり、これは積極的に言えば、超観である。

ヘーゲルは「善の理念」の項で、「概念は自己を実現しようとする衝動である」と言っているが、既述のように、「自己」を文中に入れる使い方をしばしばする。筆者は「概念」を「概念₁」とし、「自己」を「概念₂」として、概念₁は、とりあえず固定しているものとし、概念₂は、概念₁から動いた新局面に立つものであり、この段階では、善になっている。筆者は、このように数字_{1,2}を使用することによって、ヘーゲル大論理学全部にわたり彼の考えを検討した。そして、数字_{1,2}を使用する都度言っていないが、その数字の間に反照が有るのである。

絶対的理念は大論理学が歩んで来た過程そのものであり、結論であるが、その絶対的理念は同時に筆者の結論でもある。しかし、これまでの過程の中に結論がある。筆者は大論理学を反照論理学として、しかも弁析法として考えて来た。上述の数字_{1,2}の使用は、弁析法の一例であり、そこに反照論理学がある。

ヘーゲルは、概念と実在態との対立の止揚、統一は主観態にのみ基づくと言う。しかし反照論理学から言えば、他者への反照と〈自己〉への反照との〈自己〉への反照である。〈自己〉は〈自己〉と他者との総体性である。〈自己〉は、差し当たって〈私〉の思考と言えるが、思考する〈私〉の脳は、〈私〉の身体の内にながら、未知である限り、〈私〉の思考の外である。内であると同時に外であり、外であると同時に内となっている。そういう〈自己〉が有るのである。この〈自己〉は単なる〈私〉の思考であるのみではない。それもそのはず、他者の構造は〈私〉の思考構

造であり、その限りで、直ちに〈私〉の思考構造は他者の構造だからである。